

---

# 分岐～天国か地獄

赤とんぼ

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

分岐～天国か地獄

【NZコード】

N3884D

【作者名】

赤とんぼ

【あらすじ】

人間がギャンブルで落ちていく様、そして家庭崩壊、あの時こうしてれば、あの時の一言が。誰にでもある後悔、悲しみ。・・・。一人の男の人生の分岐点を描いた小説です。

## 第一章 失業

私は何がしたいのだろう。

私は何処へ行きたいのだろう。

私には只一つ、ハッキリと解る事がある。

あの時、何か違うアクションを起こしてしまったならば今と違う感情で毎日を過ごしていただろう。

人生とはほんの少しこことで変わってしまうものなのだろう。  
もしかしたら、それが私の運命だったのかもしれない。

十月の半ば私は長年勤めた会社を辞めた。  
原因は上司とのトラブルだった。

まあ誰にでも経験はあるだろう。

会社を辞めた私だが、後悔はなく、むしろ解放されたかのよう  
な清々しい気持ちだった。

あの上司の顔をこれから見ないですむという事がなにより嬉しかつ  
た。

しかし、ただひとつ気懸かりもあった。

それは、9月に結婚したばかりであった事だ。

新婚生活1ヶ月にして私は無職となつたのである。

もちろん直ぐに新しい仕事は探すつもりでいた。

問題は給料だ。

今までには多いとはお世辞にも言えなかつたが、それなりには貰つて  
いたと思う。

妻も結婚を機に会社を退職し、生活は私の稼ぎでやつていくしかな  
かつた。

妻からしてみれば詐欺にあつたみたいなものである。

結婚生活一ヶ月にして先が解らない毎日を過ごすことになるのだから。

私は家に着くなり妻に会社を辞めたことを伝えた。

返ってきた答えは私が考へていたこととは違い、簡単な答えた。

「そう。毎日辛そだつたもんね。仕事に関しては私が口出す事じ  
やないし、あつでも次の仕事は早く決めてね。」

妻がそつとつてくれたのが何よりも嬉しかつた。

確かに私は朝早くに仕事に出かけ、帰つてくるのは毎日午前零時近く。

結婚してからも、夫婦らしい会話はなく、会社から帰ると私は死んだように眠りにつく、それが毎日だつた。

妻からしてみれば、結婚式もあげず、新婚旅行にも行かず、会話ら

しご会話もない、こんな毎日を送るよつ、もつと新婚生活を満喫したかったのだ。

会社を辞めた次の日、私はハローワークに向かった。

選ばなければ仕事などいへりもあるだひつ、そう思つていた。

しかし、この不景氣でろくな仕事はなく、あつたとしても今までの給料の半分で、とても受けでみよつと思つ仕事はなかつた。

朝一番でハローワークに掛けたはいいが昼前にすることがなくなつていた。

「まあまだ初日だしな。」

私は独り言を言いながらハローワークを後にした。

家に帰ることしても時間が早すぎても帰る気にはなれなかつた。

私はいけないととは解りつつもパチンコ屋へと足を向けた。

数年前まではスロットをよく打つていてスロットには多少自信があった。

少しでも生活の足しになればと思つたのだ。

・・・いや、自分で中でそう想つただけで、正確には、ただこのムシャクシャした気分をどうにかしたいだけなのだ。

一時間近くスロットで勝負して、五千円が八万円になつた。

七万五千円勝つたのだ。

今の私にとつてみれば会社を辞め少しでも金が欲しい時にこの七万五千円は有り難かつた。  
それに、スロットを打つ前までムシャクシャしていた気分が嘘のようスッキリとしていた。

私は勝つた金でケーキを買い家に帰つた。

家に帰ると妻が

「仕事何か良いのあつた?」と聞いてきた。

私は  
「大した仕事無かつたよ。明日また行つてみる。」とだけ答え部屋  
に閉じこもつた。

次の日、私はハローワークに出掛けたと言いパチンコ屋に直行した。

その日は夕方まで打ち、一万円使って、十一万円になつた。  
ちょうど十万円の勝ちである。

普通の会社員が一日で十万円稼ぐことなど、まずあり得なく、これがギャンブルの楽しさであり怖いところなのだ。

私は家に帰り妻に言つた。

「なあ、しばらくの間、スロットで稼いでも良いか?お前も俺のスロットの腕知ってるだろ?。」

私がそう言つた瞬間・・・妻は一瞬だけ悲しそうな顔を浮かべ・・・  
倒れた。」

私の頭の中は暗い闇に覆われていた。

私にはどうすればいいのか解らなかつた。  
どんなに辛くとも、どんなに嫌いな人間が職場にいようと家庭の  
為には我慢するべきだつたのだろうか。

私は病院にいた。

妻が倒れ車で病院まで運んだ。

しかし、ここには産婦人科だつた。

妻はお腹の中に私の子供を身ごもつていたのだ。

なぜ彼女は私に話してくれなかつたのだろうか。

このことを後三日早く知つていれば私は我慢して会社に残つたのだ  
ろうか。

私は子供が欲しかつた。自分の血を受け継いだ子供が欲しかつた。

彼女は今の心境で私が会社を辞めた事を受け止めてくれたのか。  
本当は辛かつただろう。

泣きたかつただろう。

・・・私が何とかしなくてはいけない。

私の責任だ。

私がここでしつかりしなくては生まれてくる子供に申し訳がたたな

い。

私は妻に一言

「とりあえずハローワークに行つてくる。お前は何も考えずゆつくり休んでろ。」

そう言って病院を後にした。

ハローワークに来たものの載つている求人は一日前と替わつておらず、まあ当たり前のだか、とても受けてみようと思つ会社はなかつた。

私はパチンコ屋へと足を向けた。

妻はギャンブルが大嫌いだった。

妻の両親はギャンブルの借金が原因で離婚しており、その為、私のギャンブル好きに頭を抱えていた。

妻が倒れた原因もツワリというよりも私が無職の身分でありながら呑気にパチンコに行き、しかも、暫くスロットで稼ぎたいと言つたことにショックを受けたの事だろう。

しかし、その時の私には、金を稼いで楽をせてやる。この感情が強かつた。

普通に考えれば、そこでギャンブルって考えにはならないはずなのに、私にはそんな余裕さえなかつた。

その日は夜7時近くまでスロットを打つた。

結果は二万ちょっとの勝ち。

日当として考えれば充分な額だと思つ。

私が犯した過ちの一つは、その勝つた二万を妻に渡した事だった。

その日の夜、私は勝つた二万弱を今日の稼ぎ分と言つて妻に渡した。

・・・妻の目から涙がこぼれ落ちる。

「アナタは私が入院してる時でもパチンコに行くの？アナタは私が今どんな気持ちで入院してるか解つてる？私のお腹にはアナタの赤ちゃんがいるのよー。」

妻は私にそう言つて泣き崩れた。

少し考えたら解ることだったのに、せめて今日ぐらいはパチンコに行かず何かしら仕事を探さないといけなかつたはずなのに。せめてパチンコに行つたことを妻に言わなければ・・・。

長い沈黙が流れ妻が言葉を発した。

「別れましょ。」

## 自慰

妻は退院後、荷物をまとめ出でていった。

わずかひと月共に生活しただけのアパートから出でていった。  
もちろん私は自分に出来る限りの言い訳を言い、三十半ばにした大人が恥ずかしいくらいの涙を流し説得もしてみた。

妻の気持ちは変わらず気がつけばアパートのなかで1人物思いにふけっていた。

妻の名前は楓と言つ。楓は名前の通り穏やかで、どこか暖かい感じがする女性であった。

住んでいるときはとても狭く感じていたこのアパートも、いざ一人になつてみればとても広く感じた。

まるでコンサートホールの中に一人で佇んでいるような感覚だった。

私は1人になつたアパートで楓のことを想い自慰行為をおこなつた。

寂しくて淋しくて何度も何度も楓との性行為を思い出し自慰行為をおこなつた。

気が付くとカーテンの隙間から口が射し込んできた。

放心状態で自慰行為を行つていた私は我に返り窓を開け早朝の秋風を部屋一面に吹き込んだ。

これからは1人なのだ。

いくら考えてみても楓が戻つてくれるとは思えなかつた。

時計を見ると七時半。

私はこれからの事を考えてみた。

独りになつたのだから無理に仕事を探す必要もなく、私は暫くはスロットで生計を立てていこうと考へた。

しかし、さすがに今日からスロットを打つ余裕はなく、私は楓の匂いが残るこのアパートで楓の事を想い自慰行為に明け暮れた。

何度も。

何度も。

・・・・・夢を見た。

私は自分でも気が付かないうちに眠つていたようだ。

私は眠氣眼に夢を思い出していた。

そこはとても懐かしくて暖かい場所。

ここは市民公園のベンチ。

初めて楓と出会つた場所だ。

私がベンチに座り仕事をサボつて当時お気に入りの缶コーヒーを飲んでいた時だつた。

前のベンチに三人組の○しが昼食を取っていた。

1人はポツチャリ体系の女。

私は心の中で勝手に閑取とあだ名を付けた。

そして、体系は普通で、顔は綺麗目な女。しかし、どこか冷たそうなこの女には雪女とあだ名を付けた。

そして真ん中に座っていたのが楓だった。

髪はサラサラのロングで清潔感がだだよう清楚な感じの女だった。男ならこういったタイプの女にはみんな弱いと思う。

私も一瞬で惹かれていた。

だが最初の出会いはそれだけで終わった。

楓と話すようになるのは、それから数ヶ月後の事だった。

楓に惹かれた私は仕事の昼休みや、仕事の営業中に市民公園によく足を運ぶようになっていた。

楓に会える確率は約10分の3。

毎日、昼食に市民公園を利用するわけではないらしく、晴れた日の水曜日に会う確率がもっとも高かつた。

楓と初めて会話したのは市民公園の自動販売機で一緒になつたときだ。

と言つても楓が自動販売機に行くのを見掛けて私も偶然を装い飲み

物を買いに行つただけなのだが。

驚く「」とに声を掛けってきたのは楓の方からだつた。

「よく会いますね。お昼はいつもここなんですか？」

私は楓の言葉に緊張して

「はっはひ。」

と答えたのを覚えている。

それからは市民公園で会つ度に軽く会釈するようになつていつた。

たまに、関取や雪女が変な変な田で私を見てたような気がする。

彼女らには私が楓目当てでの公園に来てるのを見透かされてたの  
だらう。

私と楓との距離は軽い会釈程度から中々縮まらなかつたが、それで  
も私にとっては唯一の楽しみであつた。

・・・・・夢を思いだす筈がいつの間にか楓との出会いを思いだ  
していた。

私にとつて楓といつ存在の大きさを改めて思い知つた。  
私は枕を抱き締め、また自慰行為にふけつた。

## 第一章 新しいシノギ

楓が居なくなり曆は師走を迎えていた。

街はクリスマスのイルミネーションに照らされ賑わっていた。

楓が居なくなつた今となつてはクリスマスなんて辛い行事の一つにすぎない。

私は街から逃げるようにしてパチンコ屋へと足を向けた。

パチンコ屋に入つてもクリスマスマードは変わらず女性店員はみなサンタの格好で接客し、客達はみな舐めるように女性店員を眺めていた。

私の最近のスロットの成績は落ちに落ち込んでいた。

すでに勝つていた分もとうに無くなり、僅かばかり貰つていた退職金も残り少なくなつていた。

ほぼ一ヶ月毎日スロットを打つていて気が付けば負け金は五十万円を超えていた。

今は特に世間では冬のボーナス時期でありスロットの設定もすべてと言つていいくほどに最悪の状態だつた。

それならば打たなければいいと思うだろうがギャンブラーといった人種はこういう時でさえ辞められないものなのだ。

すでに頭の中には働くといった感情はなく五十万以上負けているにも関わらず未だにスロットで稼ごうと思っていた。

貯金も殆どないし退職金など気持ち分しか貯つておらず、この辺りで大勝ちしなければ正直厳しい状況だった。

「やべえな、このままじゃ年を越すことも出来やしねえ。」  
自然と口からこぼれ落ちた台詞だった。

しかし今日も戦果は挙げられず負け金増加するだけであった。  
次の日も次の日も負け金が増え続けるだけで思い描いているような成績は挙げられなかつた。

アパートに帰つた私はもう一度よく考え直してみることにした。

とにかく今の時期にパチンコやスロットで勝負することと事態間違つているんだ。

私の考えはそこに行き着いた。

それならばじうすればいい?

金は稼がなきゃならない。

・・・・・・・・

・・・・・・・・

・・・・・馬はどうだろ?'

競馬ならばボーナス時期とか年末年始など関係ないはずだ。

そうだ!それしかない。

私はコンビニへ行き新聞を買つてきた。

新聞の競馬欄を読み漁り週末にジーワンレースという大きな重賞レースがあることを知つた。

といつても私は競馬は殆どやつたことはなく、会社の先輩に十年前くらいに一度二度連れて行つてもらつたくらいのものであった。

しかし、私が行き着いた答えは、結局競馬なんて運なんだ！私に運があれば勝てる！だつた。

週末私は競馬場へと向かつた。

とりあえず軍資金は十万円。

当たれば一気に金持ちだ！

競馬場に着いた時レースは7レース目だつた。

私が勝負するレースは11レース。私はとりあえず次の8レースに一万円賭けて遊んでみることにした。

とはいってもどれが来るのかなんて解らず私は一番人気の馬連に一  
万円賭けて見ることにした。

私が賭けた数字は5-7。この二つのゼッケンの馬が1着、2着に  
来れば見事当たりといふことになる。

レースが始まつた。

私が買つている5のゼッケンを付けた馬が先頭に立ち逃げている。

もう一頭の7番は後ろから2頭田からの競馬になった。

最終コーナーを回った所で7番が追い上げてくる。

5番はまだ先頭で粘っている。

ゴールまで残り二百メートルの所で7番が先頭に変わった。

5番も粘りをみせまだ一番手で渋とさをみせていた。

・・・・・。ゴール。

一着7番。二着5番。・・・・・。

私が買った馬券は見事に的中した。

一番人気だったこともあり、配当金は低かつたが、一万円が五万五千円になつた。

これは良い。

パチンコやスロットと違い長時間、時間を掛けなくていいし、こんな短い時間でこれだけ稼げるのなら申し分ない。

私は次の9レースも1番人気の馬連に1万円賭けた。

9レースは私が買っていた馬は1着、3着に来て惜しくも外れてしまつたが本当に惜しいレースだった。

これならば本当に稼げるかも知れない。私は本気でそう思っていた。

次の10レースは稼げずに食事を取ることにした。

メインの11レースに備えて腹を満たしておこうと思つていた。

軽く食事を終えた所で丁度10レースが終わっていた。

結果は大荒れのレースで、私は賭けなくて良かつたと安心していた。

そしてメインの11レースを迎える。

## 犯罪

いよいよメインレースだ。

持ってきた金に8レースで儲けた分も足して掛け金額は13万円ある。

これだけあれば当たったときの儲けは相当な額になるであろう。

今人気になっているのは三番のゼッケンを受けた馬だ。騎手も名手で競馬をよく知らない私でさえ知っている騎手だ。

人気は圧倒的で単勝オッズは1、9倍となっていた。

軸はこの馬で決まりだろう。

私は馬連で買おうと決めていたので、この3番の馬とともに一頭良い馬を探す事にした。

しかし、これが中々決まらない。1番人気は3番の馬で「圧倒的な」  
だか、2番人気から5番人気までが拮抗しているのだ。

人気はほぼ横一線で正直どれを買って良いのか解らなかつた。

「確率は4分の1か。」

私の頭の中ではすでに圧倒的1番人気の3番の馬と2番人気から5番人気の馬のどちらで決まるか勝手に決まつてしまつていたのだ。

実際はもちろんこんなに簡単なものではなく、圧倒的1番人気だからといつて負けるときはアツサリと負けてしまうことも多い。

だからギャンブルというものは難しくもあり楽しく熱くなれるのだ。

しかし、この時の私の頭の中は確実に4分の1の確率で当たると思つていた。

ならば4点、馬連を買えば確実に当たるということになる。

私は考えに考え抜いた挙げ句に3番の馬から4点馬連を買つことにした。

これで百パーセント当たる！

私は自信に満ち溢れていた。

3万円を4点買いし、残った1万円を三連単という一番難しい馬券に1点賭けてみることにした。

そして運命のレースが始まった。

・・・・・・・・

午後4時、私は競馬場の客席にいた。

表彰台では勝った騎手がインタビューを受けていた。

私は放心状態のまま、その場を動けなかつた。

勝つた馬は7番人気の馬だつた。

圧倒的1番人気だつた3番の馬はといふと11着。ずっと後方で競馬をしており最終コーナーを回つてからも伸びべくることはなく、そのまま惨敗したのだ。

私はわずか数分の間に13万円という金額を失つたのだ。

当たるはずだつた百パーセント当たる予定だつたのに。

しかし、いくら後悔してみても金が戻つて来るはずがないことを誰よりも自分自身が一番解つていた。

競馬場からの帰り道、私はムシャクシャした気分からか犯罪を犯してしまった。

別に悪気があつたわけではなかつた。

別にどうしても欲しいわけでもなかつたのだが。

競馬で金が尽きた私は生活費を卸すため近くのATMを探した。駐車場が埋まつていたために近くのスーパーの駐車場に車を止めATMまでの道を歩いていた。

近くの家の洗濯物が目に入つてきた。

その中には下着も干しており、その中の一つに私の目は釘付けになつた。

そして気が付くと私はその下着を盗み車に戻つていた。

私は変態なんかじやない。

下着が欲しがつた訳ではない。

ただ  
ただ

その下着は楓が履いていたパンティーと同じ物だつたのだ。

私はいつのまにか競馬で負けたことも忘れアパートに帰つていた。

この3日間、私は一步もアパートから出ていなかつた。

食事も殆ど取つておらず、毎日、毎日、自慰行為に明け暮れていた。

楓に会いたくて仕方なかつた。

金も底をつきかけていて、来月の家賃や光熱費、その他諸々の支払いを済ませる為の金もなかつた。

何もやる気が起きず、どこかに出掛ける氣にもなれない。

私がやつている唯一の事といえば盗んだ下着の匂いを嗅ぎながら自慰行為をする事だけであつた。

自分が無性に虚しくなり、死にたくなつてくる。

このままじゃいけないことも解つてゐる。

しかし、体が拒絶反応を起つす。

何もする気が起きないのだ。

私はこのまま落ちぶれていくのだろうか？いや、もう十分落ちぶれているではないか。これ以上落ちることはないのではないか？自分に問い合わせてみる。

しかし、このままでは来月の支払いができるず、借金するしかなくなつてしまつ。

・・・・・・・・・・

私は考える。

・・・・・・・・

とても働く気にはなれない。

・・・・・・・・

借金はしたくない。

・・・・・・・・

車を売るしかないか。

私が出した結論はこれだった。車を売り金を作る。  
その資金を元手に一発当てる!  
これしかない!

問題は何で勝負するかだ。

パチンコ、スロットは厳しいだろう。

競馬はもうしたくない。

・・・他には宝くじ、競輪、ボート、オート・・・。この辺りか。  
悩む。

どれなら私は勝てるだろうか。

宝くじは確率的に奇跡でも起きない限り当たらないだろうからバス  
だ。

後は、競輪、ボート、オート。

オートは全く解らないためバスだな。

ボートは若い頃一度だけやつた事はあるが儲かつた記憶はない。

競輪しかないな。

結論がでた。

まずは明日、車を売りに行こう。

そう決めると不思議と怖さが無くなってきた。

私はまた、盗んだ下着の匂いを嗅ぎ始めた。

落ち着く。

楓がそばにいるみたいだ。

楓に会いたい。

会つてやり直したい。

楓のいない暮らしは有り得ない。

洗濯も炊事も掃除も楓がいなくなつてからは一度もやつていない。  
やる気も起きないし、やり方もよく解らない。

私は楓がいないと何一つ自分ではできないのだ。

私は楓との出会いを思い出す。

市民公園で会釈するようになつて数ヶ月が過ぎた頃、楓の〇・仲間の関取が私に話しかけてきた。それは意外で私が待ち望んでいた答えだつた。

「楓が貴方のこと気になつてるみたいですよ。」

「えっ！？」

「この市民公園で貴方と会うのが楽しみだつて楓が言つてましたよ！」

「えつあつああ、そうなんですか。」

私は顔を真つ赤にして答えていた。

内心は嬉しくて嬉しくて飛び上がりそうなくらい嬉しくて、今にも叫びだしたい気分だつた。

関取はそれだけ言うと楓達の所に戻つていつた。

向こうから楓の声がした。

「ミチル何話してたの？」

どうやら私が関取とあだ名を付けた女の名前はミチルと言ひりしき。

「内緒。」

関取ことミチルが楓に言つた。

しかし、冷静に考えてみれば何がおかしい。

本当に楓が私みたいな冴えない男の事が気になるだろうか？これは何かの罰ゲームかドッキリなのではないだろうか？

私の心中で信じられない今日の出来事が受け入れられないでいた。しかし私の不安をよそに私と楓との距離は急速に縮まり始めた。

これも全て関取ことミチルちゃんのお陰だろつ。

この次の日、また市民公園で楓に会えないと私は公園のベンチに座っていた。

そして昼にいつもの〇・三人組がやって来た。

自動販売機で楓と一緒になった私は思い切って楓に声を掛けた。「ここにちは。」

私は勇気を出して声をかけた。本当は楓は私の事等何とも思つてないのかもしれない。関取が私をハメようとしているだけなのかも知れない。

それでも私にはチャンスだと思えた。

騙されていたとしても構わない。

当たつて砕けるの気持ちで話しかけた。

その後は何と話したかはよく覚えていないが、この日を境に楓と話すようになつていった。

そして、しばらくたつたある日、私は覚悟を決めてデートに誘つた。

・・・・・。

楓に会いたい。楓を抱きしめたい。楓とセックスをしたい。

私はまたパンティーの匂いを嗅ぎ始めた。

何回自慰行為を行つても満足できなかつた。

盗んだパンティーは楓の物ではない。それは解つている。それでも楓が履いてたと想像し自慰行為を行う。

私の頭はどうどうおかしくなっていったのではないか。

ギャンブル。

自慰行為。

毎日その繰り返し。

心は不安に襲われ、頭はおかしくなりそうで、それを抑えるために何も考えずに自慰行為を行うのだ。

ただ射精した後の虚しさや淋しさ悲しさは、とても耐えられるものではなかつた。

自慰行為に疲れたら眠る、それが私の一日の終わりだった。

次の日、私は車を売つて金を作つた。

## 分岐へ 天国か地獄

クリスマスも過ぎ、明日を大晦日に迎えた12月30日、私は競輪のグランプリという競輪の最大のレースに人生の全てを賭けることにした。

車も売つてしまつた。

楓も居なくなつてしまつた。

仕事も辞めた。

私には何もない。

このレースに全てを賭けよう！

私の最後には相応しい。全くといってやつたことがない競輪に今、持つている全ての財産を賭ける。

多分当たらぬだらう。

自分でもそんな気がする。

今の私に運が残っているとはとても思えない。

それでも、このまま普通に生きていく気力もない。

「外れたら死のう。」

私は決意していた。

借金がない今が引き際だと。

私の35年と半年の人生、楓と出逢えたことが全てだった。

思えば気が小さい私は今まで生きてきて楽しいことなどなかつたような気がする。

人の顔色ばかり気にして、自分の意見も言わず、人付き合いも出来なかつた。

楓が全てだつた。

楓が居てくれるのならそれだけで良かつた。

今頃気づくなんて。

仕事なんか何だつてよかつた。  
ギャンブルなんてしなくてもよかつた。

ただアナタに側にいて欲しかつたんだ。  
いくら後悔しようとも時間が戻ることはないんだ。

今という現実を受け止め今ある様々な人生の分岐点から1番の道を探さなくてはいけないんだ。

たとえ誤った分岐を選んでしまつたとしても、次の分岐で正しい道を選んで生きていかなきやいけないんだ。

私は人生の分岐を誤つてしまつた。

きっとこれが最後の分岐になるだらつ。

その最後の分岐がギャンブルというのが私らしいのかもしれない。

当たれば車を買い戻し、仕事を探し落ち着いたら楓に会いに行こうと思つ。

たとえ楓が戻つて来てくれなくとも会いに行こう。

外れれば私の人生に終止符を打とつ。

なんて勝手で自分よりの意見だと思つ。

それでもこれが私が侵した過ちであり答えなんだ。

明日は大晦日。

新年を私は迎えることが出来るのだろうか。

もうすぐレースが始まる。

待っているのは天国か地獄か。

数分後には全てが分かる。

そして・・・・・。

レースは始まった。

・・・・・私は・・・自分が選んだ・・・・・分岐の・・・・  
・・・・・答えに向かつて・・・・・歩き出した。

## 分岐 番外編 ミチルの唄～カールの王子様。

正直言つて私は綺麗じゃない。

痩せてもいいない。

いいえ。はつきり言って太ってるわ！

昨日体重計に乗つたら60キロはゆうに越えていたわ！

でも私だつて楓みみたいに綺麗になりたい。

私は東条ミチル。

薬品会社のOーをやつてるの。

こんな私にだつて数年前までは彼氏だつていたんだから！・・・・  
・・・・一週間で振られたけど・・・・。

でもね聞いて！私最近、気になる人が出来たの！

このお話はおデブちゃんのチョッピリ切ないラブストーリーです。

今日は待ちに待つた給料日！

今日はじそは憎つべきアイツを叩きのめしてやるわ！

私は昔付き合つてた彼氏（一週間だけ）の影響でスロットにハマつてた。

私がいつも打つ台はカエルのキャラクターがメインのスロット台。

これが中々当たらない。

ゲッコゲッコ鳴くばかりで私の少ない給料を吸い取っていくのー！

でも今日このそはー！

私がここまで熱心にこの台を打つのには一つほど理由がある。

一つは、私にはよく解らないけどスロットの規制の何たらで大好きなこの台が今月一杯で外されるらしいの。

だから今月一杯はどんな用事よりも、このカエルちゃんを優先するわ！

悔いが残らないように、そして何より、今までカエルちゃんに絞り出されてきた私のお金を取り戻してみせるのー！

それともう一つの理由は、私の好きな人の人と逢うため。

いつものお店の私と同じカエルちゃんの台を打つアナタと逢うために、私はこのお店に通うの。

このカエルちゃんの台は大当たりを引けば、オマケ的なものがあって、大当たり中に田押しをして遊べるようになってるの。

上手く田押しができれば、液晶上のカエルちゃんが変身していつて王子様になつたり、メタルカエルちゃんになつたりするんだけど、私はまだ一度も成功したことがないの。

私が気になるあの人は、大当たりを引く度に毎回必ず王子様やメタ

ルカエルちゃんを出してるのよ。

もうホントにさり気なくね。

その姿に一目惚れしちゃいました。

決して今時のイケメンって感じでもなく、髪はボサボサで良いように言えば無造作へーー？

洋服のセンスだって良いとは言えないんだけど、あのさり気なく力エルちゃんを打つアナタが好きです。

でも解つているの。

それは決して叶わぬ恋。

私には手に入れられない恋。

そして想つてもいけない恋。

だってアナタは来月結婚するから！

・・・・・

私の一番大切な親友と・・・・・・

だから、この1ヶ月だけは、アナタと一緒にこのお店で大好きな力エルちゃんを打たせてね。

誰も知らない私だけの秘密。

アナタと結婚する私の親友だって知らない秘密の場所。

それがパチンコ屋さんってのもムードがないね。でもそれが私らしいかもね！

それともう一つだけ、私は・・・・・・親友の楓とアナタが出会つ前からアナタの事が好きだつたんだからね。

市民公園でアナタが楓に恋する前から私は、このお店でアナタに恋してたんだから！

でも、もういいのアナタも楓も私にとっては大切な人。

二人が幸せになるのなら応援するよ！

だからゴメンね楓。

カエルちゃんが外されるこの一月だけは、このお店で彼と私の一人の時間を許してね。

「あれっ、ミチルちゃん来てたんだ！調子はどう？」

「まだ負けてる。でもそろそろ来ても良さそうなんだけど。」

彼と話すこんな何気ない会話に幸せを感じる。

「せうだね！」のゾーンは当たりやすいし、ストック沢山貯まってそうだね！当たればいいね！」

「うん。頑張る。」

ゾーンと言つのは大当たりし易い回転数の事で、ストックつて言つのは台の内部に大当たりが貯まつてることを言つの。

「ミチルちゃん頑張つてね！あつ、俺がスロットしたこと楓には内緒ね！」

「解つてるよ。ギャンブル嫌いだもんね楓。」

せめて、このお店でカエルちゃん打つてる時ぐらいはアナタから楓の名前聞きたくなかったな。

つて無理な注文だね。

その後、私の台は見事に大当たりして大連チャン！久しぶりの大勝ちができた。

「神様ありがと！せめて今月一杯は毎日カエルちゃん打てるように見守つてね。」

私は一人呟いて家路についた。

・・・・・・・・。

今日がカエルちゃんの台が外される最終日、何とか今日までお金が尽きずに済んだ。

悔いが残らないよつと一杯楽しまなくちゃ！

きっとあの人も来るだろつからね。

今日、私は有給を取り朝から並んでる。

「閉店まで出し殻くしてやるんだからー」

私が一人意氣込んでいるところに彼はやつて来た。

「おっーミチルちゃん早いね！  
気持ちちは分かるよ今日が最後だからね。  
この台無くなつたら寂しくなるね。」

「うん。今日だけは絶対に勝ちたいね。・・・最後だからね・・・。

そう。カエルちゃんのこの台が今日で最期のよつと、この台を打つ  
彼の姿を見れるのも今日が最後になる。

しかも彼は来週結婚する。

奇しくも私はその結婚式で、楓の友人代表として挨拶をする事にな  
つていた。

店がオープンして、私は昨日から狙っていた台を無事にゲットする  
事ができた。

・・・彼が隣に座った。

「今日は、ミチルちゃんの隣か。よーし、ビッチが全くロイインを出  
せるか勝負！」

「いいよー。私が勝つたら、私のお願ひ聞いてね。」

「いいよ。じゃあ早速勝負開始！」

私は本当に嬉しかったんだ。

最後のカエルちゃんでアナタと隣同士で打てることが最高に幸せだつたんだ。

私が勝つた時のお願い。

・・・・・私と一緒に一度いいからテーートしてくれる？・・・・・。  
言えるわけないか。

彼はいつものように淡々とレバーを叩く。

横にはお気に入りの苦めのコーヒー。

私は本当に彼のスロットを打つ姿が好き。・・・私の台の液晶にカエルが出て来た。このカエルが5回転連続でれば大当たり確定なんだけど。

2回転目もカエルでした。

3回転目で・・・ゲコゲコって鳴き声とともにプレミアムの大ガエル登場！

大当たり確定！

さい先良いスタートに私はホットした。

「お、プレミアかいいね！」

彼の言葉に

「本当に私がコイン多く出したら、お願ひ聞いてもらうからね。」

つて返した。

「怖いな。まあ俺に勝つたらね。」

彼は余裕たっぷりの表情で言つてくれる。

絶対に勝つてやるんだから！

私の闘志に火が付く！

お皿を過ぎて私の台は良い感じで連チャンしていた。

しかし予想とは裏腹に彼の台が全く大当たりしない。

彼の表情も次第に険しくなつてくれる。

夕方結局彼は大負けして席を立つた。

「今日は駄目だ！流石にこれ以上は使えない。」

彼が私に言った。

・・・私は以前、市民公園で彼と楓の中を取り持つた。

私の中の辛い記憶。

市民公園で彼を見かけるようになって、楓から彼の事が気になると告げられた。

私は彼を市民公園で見かける前からずっと好きだったけど、私は臆病で、容姿にも自信がなかった為、楓に私も本当は彼が好きって言えなかつた。

今でも後悔してゐる。例え振られても自分の気持ちを伝えたかつた。

でも当時の私には出来なかつたんだ。

結局、楓と彼は来週、結婚する。

私の精一杯の勇気だつた。

「私のコイン使って良いよ。」

しかし彼は

「流石にそれは貰えないよ。楓に怒られちゃう、それに俺にも多少のプライドあるしね。」

そう言って席を離れよつとした。

「あつそつだ！約束。コインの枚数勝負！

明らかに俺の負けだから、ミチルちゃんのお願い何でも聞くよーー言つて！何が良い！

私のお願ひ…………。

「私と…………私の親友の楓、絶対幸せにしてね！……約束！」

「…………解つた。必ず幸せにするよ！約束する。」

そう言つて彼は帰つて行つた。

さよなら…………私のカエルの王子様……。

私にはカエルの王子様より、カレーの王子様の方が似合つてるよね。

私の台は終日、連チャンが止まらず、コインは初めての1万枚を超えた。

閉店間際の最後の大当たり、私はオマケの目押しゲームで初めて王子様を出す事ができた。

彼は私に振り向いてくれなかつたけど、二つの王子様は振り向いてくれた。

私はこのカエルちゃんのスロットに沢山の思い出を貰つたと思つ。彼との思い出、勝負事の難しさ、スロットの楽しさに目押し。

本当に有難う。そして・・・バイバイ・・・カエルちゃん。

私は帰り道、コンビニでカレーの王子様のレトルトと彼がいつも飲んでいた苦めのコーヒーを買って帰つた。カレーは流石に甘く苦め

の「一ヒーが甘さをかき消してくれた。

来週の結婚式、私は定番のテントウ虫のサンバじゃなく、カエルの歌を唄おうと思つ。

きっとみんなはウケ狙いだと思ひだらけだ……彼は気付いてくれるよね！

私と彼の秘密の鳴き声

お わ り

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n3884d/>

---

分岐～天国か地獄

2010年10月11日03時14分発行